

木で育ち 「木育」が求められる時代

岐阜県立森林文化アカデミー
廣田 桂子

身近なくらしから森や木そして竹が影を潜めて久しい。これらへの関心・歓心が薄れたことから、私達のくらし環境は山や森から遠ざかり、生活用品から木製が減少し、余暇の過ごし方も、木の住環境をメンテナンス(日曜大工)するのではなく、くらしとは直接的関連の乏しい多様な趣味へと変貌しました。かろうじて木の製品があったにしても、素材として木材を求めることが主流であり、その地域環境で地産された国産材でないことがほとんどです。ですから、現在盛んに指摘されている環境問題において、その原因は各国様々ですが、日本の場合、先述したような社会やライフスタイルの変化に伴うところが大きいとみられるのです。日本の主だった環境問題要因は、他国で見られる森林環境の乱開発でも、自然浄化能力を超える汚染でも無く、使われないことから産業として立ち行かない状況が続き、そのため整備もされず、使うことを前提に植林された森の脆弱化が指摘されます。これは、森林環境の放置によって荒廃していると言えるのではないのでしょうか。ですから、森林問題というとまるで‘森林の問題’のように勘違いしがちですが、くらしやライフスタイルといった人の部分をともなう複合問題を再確認する必要、そして、ソフトの部分も含めた、くらし環境の改善が求められています。これが今、国策として「木育」を推奨している理由です。

このように木育は、森林・林業基本計画(平成18年9月)において、「市民や児童の木材に対する親しみや木の文化への理解を深めるため、多様な関係者が連携・協力しながら、材料としての木材の良さやその利用の意義を学ぶ、「木育」ともいべき木材利用に関する教育活動を推進する」と位置付けられました。具体的な取り組み方として、ステップ1「触れ、感じる」、ステップ2「創り、楽しみ、学ぶ」、ステップ3「知り、理解し、行動する」のステップ・バイ・ステップ方式が提案され、教育機関では環境教育との連携の中、社会、理科、家庭科、国語の一部として取り込まれ始めていますが、現実には専門家がいる訳でもなく模索中の取り組みです。

そこで、建築では、くらし環境へ生きている「樹」や切り倒された後の「木」を、率先して建築空間へ介入させながら、「樹」「木」両方を通しての建築空間創りを試んでいます。その第一歩として、園舎の木育化に着手し始めました。基本的に土地があってその上に人間。この土地と人間との関わりが、あるまとまりをなして一つの生活を組み立て、その集団として地域が成り立っています。この人間側と言えば、祖先から子供までのつながりがありますが、未来を考えるには、そのつながりを子供中心に捉え、コミュニティーでの中継地点として地域の保育園を取り上げます。子供たちが世界と関わり・育むプロセスの場を借り、保育に関わる方々、子供たちや周辺地域と一緒に、保育園という建築を木育と

ともに考えるのです。

ここで鍵になるのは、木造の保育園です。子供にとって、人とだけでなく、自然と触れ合い、心と体で感性を身に付けるプロセスは重要です。そんな幼児期のあらゆる体験を提供する最高の場が、木造の保育園です。木造空間は、心と体の基本を創る重要な幼少期に、繊細で優れている総合的な環境を提供するからです。山・森や木材の豊かさを体感し、人と自然との関わりを主体的に捉え、それらの表現可能で豊かな心を育む場として、木造の保育園は多くの可能性を秘めています。しかし、木材をつかった建物なら何でも木育の保育園になるという訳ではありません。ここで、私達が着目しているのが「環境」「地域」そして「感性」という、3つの木育のモチーフです。そのイメージを写真1-4で例にあげてみたいと思います。



▲写真1: 敷地環境にあるモチーフ。敷地の隣にたたずむ小さな森。暗い森は、ワクワクする予感。



▲写真2: 地域の中にあるモチーフ。地域の集まって住むカタチは、コミュニティーの存在と街の匂いなどとして五感を刺激する。



まわりのカタチは五感を刺激し、異なる発想は、お互いのコミュニケーションを通して、多様性の世界を知る。



足で床を感じて手で表現する。

◀写真3&4: 感性の中にあるモチーフ

このように、木育のある保育園を創るモチーフは、私たちのくらしを支える内外に色々なカタチでちりばめられています。あらためて、すべての生き物がこの地球上で互いに糸で結ばれており、そのつながりで生きていること、この生き物の中に私達が存在し、同じように「樹」があり、切り倒された後は親しみのある素材「木」として、私達のくらし環境を彩ってくれていることを実感します。それを邪魔する事無く、連続したカタチと関係で木造の園舎をデザインすることが、今森林文化アカデミーの木造建築講座で行われている試みです。

●詳しい内容が知りたい方は

TEL(0575)35-2525 森林文化アカデミー まで